偶数の頁は裏よ桐一葉　甲州　千草
東京は乾いた生簀鰯雲　七種　年男
マザーツリー月光太く届きたる　辻　美奈子
籠り居の矜持や後の更衣　千田　百里
芒原こころ奪はるとき恐し　小野　寿子
寂しさやなべて色濃き盆のもの　栗原　公子
性格の不一致といふ暑さかな　菊地　光子
残る蟬全て招きし大樹かな　高木　嘉久
新涼や口にひんやりハーモニカ　能美昌二郎
噴水の光のシャワー遠嶺晴　佐久間由子
雲が行くのみ花野には蜜・羽音　大畑　善昭
ゆつくりと森を満して霧動く　広渡　敬雄
花薄風には風の東歌　矢崎すみ子
コンパスの銀の軸足秋立てり　石田　静
白桃の水のかたちを毀しけり　兵藤　恵

沖の水脈

武蔵野は風の国原赤蜻蛉　栗坪　和子
もつともつと熱が欲しいと赤カンナ　村上　葉子
灯火親しルビへすり寄る天眼鏡　森村　江風
全方位水平線や秋の航　小田　里己
まんじゆさげ風の神輿を担ぐかに　諸岡　和子
向日葵のぞくぞく咲くやある愁訴　小河原清江
人形の命あづかる菊師かな　木村あさ子
外寝して星にならずに目覚めたり　道端　齊
いつか止む残暑いつ已む疫禍かな　遠城　健司
芋の露じやれあふやうに太りけり　小倉　征子
自然死てふ贅沢もあり秋螢　中村　重幸
石塊は流人の墓標曼殊沙華　宮岡　弘
黒葡萄闇湛へたり深めたり　小坂　尚子
床板の木目足裏に処暑の寺　宮下　桂子
頃合のよき暮色かな水を打つ　矢野美沙子